



K A P P A N O V E L S

SF長編小説 書下ろし

日本沈没 (下)

小松左京



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

SF長編小説 日本沈没(下)

昭和48年3月20日 初版発行

昭和50年8月1日 361版発行

著者 小松左京
大阪府箕面市栗生新家544-45

発行者 小保方宇三郎

印刷者 堀内文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613

© Sakyō Komatsu 1973

(分)0-2-93(製)02228(出)2271 (0)

SF長編小説・書下ろし

にっ ほん ちん ぼつ
日本沈没 (下)

こ まつ さ きょう
小松左京



カッパ・ノベルス

——日本沈没〔下〕 目次——

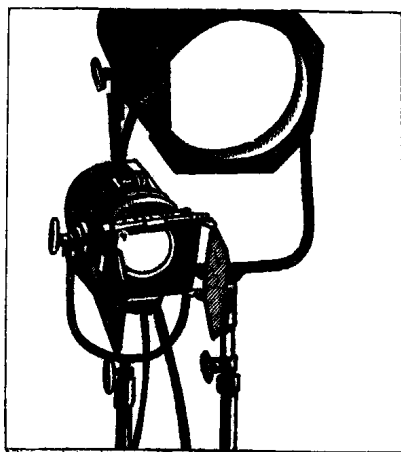
第五章	沈み行く国	5
第六章	日本沈没	165
エピソード	竜の死	211

本文のイラスト
日暮修一

写真提供
防衛庁

第五章

沈み行く国



大地震によってこうむった被害を、まだ完全に修理しきっていない首相官邸の一室で、連日連夜の激務のためげっそり憔悴した首相、官房長官、総務長官の三人がテーブルをかこんで沈鬱な顔をつきあわせていた。——三人のかこんだテーブルの上には、一枚のタイプ用紙がおかれていた。

「この問題は、これからどうあつかうべきだろうな……」首相は疲れきった声でいった。

「ここから先、さらにくわしい調査をすすめるためには、十億から百億のオーダーの予算が必要となる、という報告をうけているが……」

「やはり、防衛庁にやらせるよりしかたがないでしょうな」と官房長官はいった。「D計画の基礎研究はもうはじまっていますが——あの作戦本部を至急に拡大して、人員機材と予算をふやし……」

「だが、防衛庁だけでは、とてもこの計画をまかないきれないことは目に見えている」と総務長官はいった。「予算も、機密費の限度を大幅に越えるとなると、問題だし

——それに、退避計画のデスクプランはいくらでも立つだろうが、問題は、いつ、どういう形で、それが起こるか、ということに関するより徹底的な調査だ。これには大量の科学者の協力がどうしたって必要になるでしょう。その科学者をどうするか、ですが……」

「やはり、学術会議か……」首相は腕を組んだ。「議長と役員には、ある程度事情をうちあけて、協力要請をしておかざるを得んだろうな。気象庁や、国土地理院、地震研、防災研といったほうでも、そろそろ気がつき出す連中があらわれるだろう……」

「どうですか。——むしろ、今度の大地震に気をとられているんじゃないかな」と総務長官はいった。「それに——話がばかばかしくでかいから……かえって気がつきにくいし、たとえ、一人か二人が気がつきかけても、自分で自分を信ずる気になれんでしょう。人にいうのもさしひかえるでしょうな。頭がおかしいと思われかねないから……」

首相は腕を組んだまま、じっとテーブルの上の紙片を見つめた。

「私だって——まだ半信半疑……いや、正直いって、まだ信じられんのだ……」と首相はつぶやいた。「あまり

にもばかばかしすぎる話だ、とも思う。いくら地震の多い火山国だといって、この巨大な国が……そんな短期間に……」

のこる二人の眼も、テーブルの上の紙片にそそがれた。やや厚手のタイプ用紙の中央には、たった一行、こうタイプされてあるだけだった。

2
→^{min}D ⇐

「まったく……途方もない話だ……」と総務長官は、おあつい掌で顔をこしこしこすりながらつぶやいた。「本当とすれば——大変なことだが……もし、これがとんでもない大まちがい——というより、あの田所という風変わりな学者の妄想や計算ちがいであったとしたら……」

官房長官は、鋭い眼で首相を見た。——長い政治生活をずっといっしょに歩いてきた、文字どおり首相の子飼いの部下であり、旧制高校の後輩でもある官房長官が、もっとも気づかっているのはその点だった。国政の最高責任者である人物が、ひょっとしたら、おかしな「気の迷い」から、とりかえしのつかない大いんちきに足をふみこみかけているのではないか、という危惧が当初から

彼につきまとはなれなかった。——それも、これまでの段階なら、まだ行政の舞台裏で機密裏に事がはこべ、話が胡散くさいとなれば、すぐにぎりつぶせる範囲のことだった。だが、これから先は……もし、この方向にさらに一段階進もうとすれば、……予算も、組織も、徐々に「公的」なスケールになりはじめる。そうなったら——もし万一はずれた場合——もみ消しはむずかしくなり、政治責任が問われることになるだろう。へたをすれば、首相個人はもとより、与党全体の命取りになるかもしれない。

そうなった時、誰を犠牲にするか、と官房長官は、政界生活の間に「常識」として身についた考え方にしたがって、ほとんど反射的に物色しはじめていた。——万一の時の責任を、誰にとらせるか？ 誰を贖罪山羊にして、この人をたすけるか？ 少なくとも、自分ぐらいまでは、責任をかぶらざるを得ないだろう……。だが、それですめばいいが……。

しかし——もし、万一、それが実際に起こるとしたら……。

「現在までの調査では、まだはっきりとした結論を出せそうにない……」首相は組んでいた腕をほどくと、顔を

あげていった。「いずれにしても、もう少し調査を続行させよう。——予算も人員も、若干ふやしてみたらどうだろう?」

言葉だけ聞いていれば、慎重に、ほぼ現状のままをつづけるように聞こえたが、官房長官は一瞬はっとした。

——ついにこの人は、腹を決めたな、と官房長官は思った。——かなりなところまで、やる気だ。「政治的危険性」も、あえてある程度おかし気度で……。

「それがいいでしょう……」と総務長官は、大きな体をゆすってうなずいた。「それはそれとして——明日の幹事会ですが……」

「ちょっとその前に……」と首相はまたしばらく考えこんだ。「今から副総裁と幹事長に、連絡がつくかな……」
「副総裁は寝たかもしれないな」と官房長官は時計を見てつぶやいた。「秘書を呼びますか?」

「いや——もう少しあとでいい……」

首相は立ち上がると、棚からコニヤックの壺とチューリップグラスを三つ、自分でとってきた。

「少し疲れた……」と自分でブランデーをグラスにつぎながら、首相はつぶやいた。「あとの話は明日にしてくれんかね?」

「いいでしょう」総務長官はグラスをとりあげてうなずいた。「少し休まれたほうがいい。——私の話は、統計局の問題ですから、明日お話しします」

三人はだまってグラスをあけた。——プロレスラーのような大男の総務長官は、一氣にのみほすと、立ち上がって一礼し、ドアのほうへむかった。官房長官も一呼吸おくれて立ち上がり、首相もあとを追うような形で立ち上がった。

官邸の廊下を、総務長官から数メートルおくれて歩きながら、官房長官は、そっとささやいた。

「内閣改造ですか?」

首相は、ちよつと虚をつかれたように、相変わらずおそろしくカンのいい懐刀の顔を見た。

「今のさわぎが一段落したら……」と首相は顔をひきしめてつぶやいた。「ある意味で——いい機会と思うんだ。明日、副総裁と幹事長に会ったら……」

二人の閣僚が帰ったあと、首相は一人で客間にひきかえし、もう一杯ブランデーを飲んだ。——家族は震災後信州に行かせてあり、ひろい官邸の中には、初老の女中と、私用をとりしきっている執事と、あとはボディガー

ドたちがいるだけだった。その連中にも、顔を出さないようにいつてあるので、官邸の中は彼一人だけのようにひっそりとしずまりかえていた。

——妙なことになったものだ。……酔いが疲労をひき出してくるのを感じながら、首相は指をあげて眼頭をもんだ。——眼をつぶると、疲れがどっと背後からおそいかかり、あおむけさまに奈落へひきこまれるような気がした。しばらく椅子の背に頭をもたせかけて、その落下感覚に身をまかせていると、鉛色の混濁の霧のかなたに何かが朦朧と見えかけてきた。

それは奇妙な「選択」だった。

本職の「政治家」は、いわば「孤独な選択」の専門家であり、プロであるはずだった。——「権力」というものは、いつてみれば、そこに発生するのだ。だから「権力者」は依然として、古代以来の「カリスマ」の尾軀骨をくつつけていざるを得ない、というのがこの若い、六十代半ばにも達しない総理大臣の信念だった。——政治というものは、ついに「合理化」などはできないものかもしれない。少なくとも政治的過程が、「論理的——確率的」という意味をふくめて——過程」になるのは、はるか先のことだろう。コンピュータがさらに高度に発達

し、政治というものが、ゲーム理論や選択公理を組み合わせた一種の自動装置になってしまう日が、いつかは来るにしても——しかし、その日になっても、あるタイプの人間のとぎすまされた「カン」と、はげしい精神力をもつてなされる「決断」は、ある場面において、壮大なコンピュータシステムにまさるにちがいない。なぜなら——「政治的選択」というものの中には、コンピュータでさえ完全には予見できない暗黒な未来にむかってとばなければならぬ時があるからだ。コンピュータは、つねに「過去」のデータと「周辺」のデータから、確率何パーセントという形で「未来」を提示する。が、ある場合には、人間のカンにもとづく予見能力が、コンピュータの描き出し得ない「近道」を、飛躍によって発見してしまう。コンピュータの指示にしたがってある選択を行なうと、それによって「状況」のパターンが変わり、確率分布も変わる。その中でまたあらたな予測と計算が行なわれ、あらたな選択方向が決まる。……そのジグザグの「ブラウン運動」型の現実処理の方向づけも、結局マクロには「考え得る最良の選択」の軌道を描くだろう。しかしながら、もし最初から「結果的に見て」最良の状態が一挙に見ぬけ、そこへの「最短距離」をと

るような方向へ選択が行なわれるなら、この巨大な慣性をもつ、錯綜した現実には、巨大なスケールの「ブラウン運動」をさせることによって起こるさまざまな「犠牲」を、はるかに小さくすることが、できるのではないか？——そして「現実」とは、大小無数の、振幅も展開速度もちがう「現象系」が、相互に影響しあいながら、もやもやしたパターンを描いている巨大複雑な「複合系」であり、まだ今のところ、コンピュータにすべての「現実」がはいっているわけでもない。コンピュータはまだ幼いうえに、歴史の中でそれほどの「実績」を積んでもいない。たとえ、すべてのデータがいれられても、未来には「ラプラスの魔」が示すように、必ず「予見不能」の暗黒の部分がある……。

あらゆる「決断」をいっさい委ねられるようなコンピュータが出現したら、どんなに楽だろう……と首相は思うことがあった。「政治家」などという職業を人間がやる必要性がなくなる時代が来たら、それは幸福な時代かもしれない。人間が機械のおかげで筋肉にたよってやる「重苦患労働」から解放されたように、「政治的責任」の、苦しい精神的負担からも、完全に解放されるような日が、本当にいつかは来るだろうか？

おそらくそんな時は来るまい……と首相は思った。

コンピュータと、膨大な頭の切れる官僚群は、逆にますます選択によって左右される事態の大きさを増大させ、ますます「決定」をくだす人間の負担を巨大にするのだ。——何度かの外遊で、各国首脳とも会ったことのある首相は、世界でもっとも進んだ情報システムを持ち、もっとも高度に組織化されたもっとも優秀なスタッフを持つアメリカ大統領のすばらしい微笑にかくされた、人間とも思えない陰惨な孤独の影を見てとって、かすかな戦慄を感じたことを思い出した。それはホワイトハウスの午餐会のあと、ちよつとくつろいで歓談している時で、大統領は、日本側の客に誰彼となく愛想よく談笑し、その合間に、ちよつと話のやりとりからはずれた時だった。首相は長身の特別補佐官と話しながら、ふと大統領のほうをふりかえった。その時大統領は、誰もいない空間にむかってほほえんでいた。首相はその顔を斜め横から見ると格好になった。

——その時彼は、それを見たのだ。習慣的に笑みを浮かべた口もとと、笑っていない眼との間に浮かんでいる酷薄無残なあるもの……そしてその下から、袖丈のあわないワイシャツのカフスからのぞいている汚れた下着の

袖のように、ちよつとはみ出していた眼をそむけたくないような陰惨な孤独を……。職業的訓練によって、表情には出さなかったが、その瞬間首相は腹の底から冷えるような、個人的な、後ろめたいシヨックに全身を貫かれた。まるで大統領が毛だらけの臂をむき出して、便器にしゃがんでいるところを見たように、汚ならしい臟腑みたいなプライバシーに、うっかりふみこんでしまったばつの悪さが、彼を狼狽させた。

その「醜怪な孤独」は、首相自身のものでもあり、彼は、同じような立場にあるものだけが見ることのできる特別の鏡でもって、自分の顔を見たような気がした。

ただ一人、客間にすわりながら、首相は、今、自分があの時のアメリカ大統領のような顔をしているのだろうかと思った。——醜い押しひしがれた、魔法使いの老婆のような……。あの時は、日本の首相のほうが、アメリカの大統領よりはるかに気楽だ、と思った。その時アメリカは泥沼のような戦争をしており、大統領の「決定」は、合衆国とその相手の国の、何万という生命を左右するものだったからだ。

しかし、今、自分はアメリカ大統領よりもっと複雑な立場に立たされている。……首相は掌で脂とひげのうき

上がった顔をざらざらとこすりながら思った。——日本という国は、ほろびるかもしれないのだ。国土を物理的に喪失し、多数の国民が死に、生きのこった国民も「故郷」を失い……。この地球上のどこかほかの土地へ、「他の国」がその領土を画し、ひしめきあっている「よその土地」へ、さすらい出なければならぬかもしれないのだ。しかも——そうなる可能性がつまり一つあるとはいえ、そうならない可能性もまだ、十分にのこされているのだ！もしそうなるなら、今から、ただちに一切の準備にかななければまにあわない。いや、口北とするならば、もうまにあわないかもしれないのだ。しかし、それをやりはじめて、もし、そうならなかったら……。日本は奇妙なことになってしまい、その責任は彼がとらなければならぬ。

こんな決断というものは、人間には重荷すぎるのだ、と、首相はブランドーのグラスをゆっくりゆすりながら思った。——とても正気の人間にやれることではない。「権力」というものは、だからどんなに政治機構が近代化され、コンピューターと官僚システムが発達しても、結局「カリスマ的なもの」、非合理的なもの、非人間的なもの——「神」の代行をするような、一種の「冷酷な

狂氣」にもとづくのだ。なみの人間では、誰もこんな苛酷な問題に対して「断」をくだす勇氣がもてない。事態がはっきりすればするほど、勇氣はくじけるだろう。そんな時、「誰か」が、みんなにかわって「決断」する役をひきうけてやらなければならない。誰か——みんなの中で、とりわけ苛酷な決断のできる誰か、「神」にかわって非人間的なおそろしい役目をひきうけることのできる酷薄な精神力、特殊な氣力を持った人間が、その役目をする。それが「權力」の、どこか非合理的な畏怖をともしなう「聖化」^{ホリフレイ}をもたらす——と同時に、事態がすぎ去ってしまったえば、また決断が裏目に出れば、そういった「聖なる狂氣」の代行者は、たやすく贖罪山羊^{スケイプ・ゴート}にされ、「運命の神」の怒りをなだめるための犠牲にされてしまう。しかも、そんなことは承知で、その役目をひきうける人間が、いつか権力者の座に押しあげられて行く……。首相は、自分のことを平凡な人間だ、と思っていた。計算はきわめて緻密で、合理的で、その合理的なところがひそかに自慢でもあった。政界に足をふみ入れた時、明治型の大げさな歴史感覚を持った政治家の時代は終わったと思ひ、政治もまた綿密なデータの収集と処理によって、「企業」のように合理的に運営できる、と思ひ、人にも

吹聴していた。——だが、その彼が、いつのまにかまわりの連中の間から傑出して行き、自分でもあまり現実感のない間に、与党の長老格の人物との決選投票に勝って総裁の地位につき、首相となった時、彼は自分の持っている——そして、彼自身にとっては、いっこうほこらしくも何ともない特異な才能のことをはっきりさとらされた。周囲の連中は、彼のことを「剛胆な男」といい、政敵は「冷酷非情な計算家」と呼んだが、周囲がいつのまにか彼に信頼と畏怖を抱きはじめてのは、自分で知らぬまに、他の連中にはできないような非情な「決断者」の役を、ずっとひきうけさせられてきたからだ、ということがようやくわかってきた。——しかも、そのカンと決断が、多くの場合正しく、まちがった場合でも、とり巻きたちがってひどく冷静で動揺しなかったため、被害を最小限にとどめられ、ある場合には逆に禍転じて福にすることができたのだ。——「剛胆」というよりも、自分には、ある種の感情が……たとえば「恐怖心」といったものが、欠落しているのではないか、とわが身をかえりみて、ふと思ふことがあった。だが、もちろんそれだけではなく、人を惹きつけるある種の雰囲気——精氣のようなものがあり、それが常人を上まわる剛胆さとあ

いまって、一種のわかりにくい「神秘性」のようなもの
をかもし出していたからだが……。

自分になりたくて「最高権力者」になったのではない、
知らない間に押し上げられていたのだ、という感じは、
すでに二期つづいて政権の座についている間中、彼につ
きまどつていた。そして、それがある意味で、「いけに
え」の道であることも……。どうして自分が、そういう
タイプの人間になったのかわからない。ひょっとすると
血統のせいかもしれないし、あるいは彼を育てた、父母
や祖父母のせいかもしれない。総裁選の時、裏から彼を
推したのが、あの老人であり、老人が彼のことを早くか
ら着目していたことも知っていた。しかし彼のほうは、
老人のことを、それほど重要視していなかった。むしろ
等閑視していたわけでもなく、時折り会いに行つて、昔
話を聞いたり、美術品の話をしたりしたが、一国の宰相
として、一種の「後見」をしてもらっているという感じ
はなく、老人の見ている世界と、彼が日々処理してい
かなければならない世界とは、何となく次元がちがつてお
り、まじわることはないだろうと思つていた。——業績
からいえば、いわば「単打主義」といつてもいいような
地味で、こつこつしたやり方で、それでも確実に問題を

処理していきながら、彼は最近の政治史上、稀に見る「目
立たない宰相」として、その経歴をかさねてきた。もち
ろんいくつかの難問題や政治的危機はのりこえてきたが、
そんなものは、彼自身にとっては、大したことではな
かった。——日本は平穩な国だし、自分の政治歴も、こ
のまま平穩に終わるだろう、と思つていた。

だが、いまや情勢は急激に変わった。首都圏大震災と
いう、政治的な「大難」がおそいかかってきたうえに、
いまた、信じられないような大変動が、この国の未来
に暗黒の姿をあらわしはじめており、もしそれが本当に
起こるとするならば、それは政治的に、まったく未曾有
の大問題を投げかけるものだった。

一つの人口的、経済的、歴史的に巨大な国家が、物理
的に消滅しようとしている。……およそ、こんな奇怪な
事態に遭遇したことが、世界の歴史上かつてあつたらう
か？ こんな途方もなく巨大な問題に直面した政治家が
あるだろうか？

この「決断」は——ひょっとしたら、自分の手にあま
るかもしれない。……首相はプランデーをゆすりつづ
けながら、ほんやり宙を見つめた。——この難局を、のり
切るだけの力が、自分にあるだろうか？ 少なくとも手

をつけることはしなくてはなるまいが、最後までやりとおせるだろうか？ 途中で、自分よりもっと器の大きなもつと氣力のはげしい人物にひきついてもらつたほうがいいのではないか？

だが、そういう人物が、彼の知る範圍にいるだろうか？

考えようとしたが、急には誰をも思いつかなかった。

——ただ一人、目下着々と勢力を拡大しつつある少數野党の領袖の顔がちらりと浮かんた。戦時中投獄され、戦後も陰惨きわまる内部闘争を粘りぬぎ、左右双方からあらゆる悪罵をうけながら、がっちり組織をきずき上げてきた人物だ。だが、その人物には、どこか得体の知れないところがあり、はかりきれないような影があった。

……今すぐには見つかるまい——と首相はブランドーをぐっとあけながら思った。——もう少し事態が進めば、国内の動揺がはげしくなってくれば、突然頭角をあらわしてくるものがあるかもしれない。この事態をのりきるのに、よりふさわしい人物が見つかるまで、自分がその役を……辛く、むごたらしい「決断」の連続を、ひきうけざるを得ないだろう。

そう思いながら、自分の中に、いっこうに「英雄的」

な昂揚が起こつてこないのは、われながら変な氣持ちだつた。——自分は少しも「英雄的」でない。……「英雄」なぞにはなりたくもない。ただ、この際適当な人物が見つからないから、その「役割」をひきうけざるを得ないのにすぎない。——うまくやれるかどうかは、今のところいってられない。もし、自分よりふさわしい人物が出てくれば、その時はおのずと交替が行なわれるだろうし、そういう時がくるまでは、「運命」が自分にこの役を荷^おせつづけるだろう。……この国の政治家の誰もが口に出さずに知っているように、首相もまた、ものごとというものが「なす」ものではなく「なる」ものだ、という信念をもっていた。政治的な「意志」や「努力」でさえ、実は「運命」の巨大な流れの一部を占めるにすぎないということを……とりわけこういった、計算もできないような巨大な變動のあらわれる時は、そうであるということを……。

それにしても、これから立ちむかわなくてはならない暗黒の事態の巨大な不氣味さを思うと、ともすれば心のみだれ、圧倒されそうだった。——勇氣というものは、むりに必要とするようなものではない、というのが首相の信条だったが、勇氣は判断をくるわせないために、時

には必要となる。氣をしずめ、暗黒のあなたを見すかすために、一日二日——たとえ激務の間をぬっても——どこかしずかな所へ行って、座禅でも組むか、とブランドー・グラスを見つめながら首相は思った。——そうだ……老人にも、一度会ってこよう……。

2

第二次関東大震災は——人々は「東京大震災」と呼びならわし、それがのちには報道機関でもふつうの呼び方となったが——しばらくの間、世界各国の注視のまとなっていた。人口総数・密度とも世界最大の、ある意味では氣ちがいじみた近代的大都會をもちにおそい、その大半を一瞬に壊滅させた災厄のすさまじさは、それだけでもセンセーショナルなものだった。

「トウキョウ、第二のヒロシマと化す！」

という煽情的な見出しをつけた、ラテン系の新聞さえあった。

無統制にふくれ上がった近代的過密都市が、ある種の天災に対して、いかに危険な存在であるか、ということ——むろんそれは、かなりの部分が「日本的に例外的」

なものであったが——について、各国の識者はあらためて考慮をせまられた。とりわけその死者、被災者数の膨大さは、世界中を戦慄させた。

全世界の首脳部から見舞いのメッセージが殺到した。

「救援」好きのアメリカの新聞社、通信社は「何らかの形で」日本を助けよう、というキャンペーンをはじめた。——在外邦人たちは、毎日周辺から同情の言葉をあびせられたが、その口先の下に、すぐそれとわかるほどの「それ見たことか」といった意地の悪い感情がすけて見えることも稀でなく、さらに日がたつにつれて、人々の同情の口ぶりの向こうに、もう一つの、奇妙に執拗な関心と好奇心が——これによって日本はどうなるか、この先長期的に、この大災害が、日本にどういう影響をあたえてゆくか、ということを知りたがっていることがほの見えてきた。

極東の一角で、ただ一つ、いちはやく近代化に成功し、二つの対外戦争に勝ち、世界相手の大戦争をやったたきのめされながら、戦後たちまち復興して、GNP世界第三位にのし上がってきた日本——やたらに働き、やたらにつくり、世界中に経済的影響をあたえはじめている「不気味な」日本……その首都が、世界史上類例のない